

魂を解き放て! 10

文◎田中 勇一
text=Yuuichi TANAKA

たなか・ゆういち◎社会起業大学学長。92年、京都大学理学部卒業後、住友銀行(現三井住友銀行)入社。1998年米国カーネギーメロン大学にてMBA取得。主な共著に「たかがMBAされどMBA」。

「やむにやまれぬ思い」が イノベーションを起こす

先行きが見えない現在、これほどイノベーションが求められる時代もないでしょう。私が客員教授を務めている多摩大学大学院も「イノベーション」を実現するMBAを標榜しています。こうして巷にイノベーションという言葉が氾濫してはいるのですが、果たして現在の社会にイノベーションが本当に起こっているのかと考えると、首をかしげる人が多いと思います。イノベーションはどのような時に起こるのか。トーマス・エジソンが発明した発熱電球、ヘンリー・フォードが開発したT型フォード自動車、井深大が開発したトランジスタラジオなど時代を変えたイノベーションタイプなのは、研究者

の飽くなき情熱と努力を通して生み出されています。生物の進化、例えば、魚類が陸上上がり両生類・爬虫類になっていくこともイノベーションです。さらに、歴史に目を向けると、明治維新も社会や政治のシステム、そして生活様式が大きく変貌しており、イノベーションと呼べると思います。魚類が両生類に変化していく過程は、淡水における生息場が、どんどん狭くなっていく種が、仕方なく陸上で生きていくことを選択し、やむにやまれぬ進化的道を選んだといわれています。さらに、明治維新についても、維新の志士たちの原動力は、このままでは欧米の列強国に日本が支

配されてしまうという危機感だったの言うまでもないことかと思えます。

つまり、「イノベーション」という言葉の響きはとても美しいのですが、イノベーションが起こる現場というのはドロドロしていて、ある意味とても追い詰められた、厳しい環境なのです。

本当に追い込まれているか

こう考えると、物質的に豊かになった現在、本当の意味で追い詰めるものがない状況であるために、イノベーションが起こりにくいということが理解できると思います。

地球の温暖化など環境問題が待ったなしになっているではないか、という方もいるかもしれませんが、明治維新を起した志士たちのように本当の意味で追い込まれているかという点、必ずしもそうではないでしょう。きっと、本当に追い込まれていれば、もっとたくさんの方が行動し、多くのイノベーションが起こっているはず。

では、どのようにイノベーションを起こせるのか。ここで焦点をあてるべきは、個々人にある「やむにやまれぬ思い」です。

「やむにやまれぬ思い」を持つと、どんな厳しい環境も乗り越えていきます。そう、この「やむにやまれぬ思い」こそ、イノベーションを起こせる環境にまで自分を追い込んでいくものなのです。

貧しい人にもビジネスに挑戦する機会を提供したい、と立ち上がったグラミン銀行創業者のムハマド・ユヌスさんのように、何とか上勝町を豊かにしたいと葉っぱビジネスをつくり上げた横石知二さんのように、その「やむにやまれぬ思い」が、見事なイノベーションを生み出しました。

人それぞれが持っている「やむにやまれぬ思い」を引き出し、行動に移させていくことが、イノベーションに溢れた社会をつくることにつながります。社会起業大学もまた、そういう場になれるよう日々研鑽しています。